

# 箸墓古墳に殉葬の墓が存在する

2022年6月13日

土田章夫 (ID 10472)

## 1. はじめに

『魏志倭人伝』には卑弥呼の墓に奴婢百余名を殉葬したとある。一方『日本書紀』には垂仁天皇28年に、倭彦命（垂仁天皇の同母弟）の死に際して殉葬が行われたが、残酷さのために禁止したと記載されている。しかしその後も殉葬が行われており大化2年(646年)、薄葬令が制定され、大型古墳の築造が禁止され、同時に人馬の殉死殉葬も禁止された。垂仁天皇の治世を4世紀と仮定すると300年間日本全国で殉葬が行われていたのに殉葬の墓が一つも報告されていない。これは奇妙なことである。何かが見過ごされている可能性がある。全国規模で殉葬が行われたとして殉葬の墓の候補として「地下式横穴墓」（ちかしきよこあなぼ・ちかしきおうけつぼ）と「横穴墓」が考えられる。「地下式横穴墓」も「横穴墓」も現在一般的な墓、古墳として考えられているが実態はよくわかっていない。

『日本書紀』の記述によると初期ヤマト王権でも殉葬が行われていたことになる。また纏向には第10代崇神天皇、第11代垂仁天皇、第12代景行天皇が宮殿を置いていたとの記載がある。纏向遺跡は初期ヤマト王権の遺跡と考えられる。現在、崇神天皇陵に治定されている行燈山古墳、景行天皇陵に治定されている渋谷向山古墳、倭迹迹日百襲姫命の墓に治定されている箸墓古墳を含む纏向古墳群には殉葬の墓が確認されていない。『日本書紀』の記述からみて殉葬の墓が存在する可能性がある。調べてみると隣接して「龍王山古墳群」という小型円墳と横穴墓で構成されている古墳群があることに気づいた。

今回この「龍王山古墳群」が殉葬の墓である可能性について検証した。「地下式横穴墓」について筆者は著書『邪馬台国は宮崎市にあった！』（ビジネス社刊 2021年）なかで検証しているのでそれを記載した。

## 2. 「地下式横穴墓」は殉葬の墓

筆者は「地下式横穴墓」は邪馬台国の殉葬の墓であると推論した。以下『邪馬台国は宮崎市にあった！』から引用する。

(引用)

地下式横穴墓

宮崎県から鹿児島県にかけて地下式横穴墓（ちかしきよこあなぼ・ちかしきおうけつぼ）またそれらが集合している地下式横穴墓群が特異的に存在している。

地下式横穴墓は、地面に竪穴を掘り、そこからさらに横穴を掘って造られる墓である。地下式横穴墓が単独で存在することはなく、数基から数十基、あるいは100基以上で群をなしている。そのため地下式横穴墓群ともされる。

宮崎県のえびの市・小林市・高原町・都城市では数多く確認されている。北限は西都市・高鍋町付近となる。宮崎・鹿児島両県での発見総数は1000基を越えている。

宮崎県都城市の公式ホームページには地下式横穴墓について次の説明がある。

「地下式横穴墓(ちかしきよこあなぼ・ちかしきおうけつぼ)

地下式横穴墓とは？ 地面に穴を掘り、その穴の壁から横方向に穴を掘って造られたお墓です。古墳時代の中頃から後半(5世紀～6世紀)、南九州の内陸部から宮崎平野部・大隅半島にかけて、数多く造られました。最初に掘った穴は竪坑(たてこう)とよばれます。横に掘られた穴は玄室(げんしつ)とよばれ、遺体が納められています。竪坑と玄室の間には羨道(せんどう)とよばれるトンネル状の通路があります。羨道と竪坑が接する部分は羨門とよばれ、土の塊や石、板などでふさがれます。後から亡くなった人を同じ墓に埋葬する「追葬(ついそう)」が見られることもあります。地下に造られているため、盗掘を受ける事がほとんどなく、多くは副葬品などが当時のまま残されています。また、密封された空間のため、人骨など有機物の残存状態も良好です」

地下式横穴墓は考古学的な調査が行われており発掘された場合詳細な学術報告書にまとめられている。報告書の多くはインターネットで公開されており、誰でも閲覧可能である。これらの報告書によると地下式横穴墓群の特徴並びに被葬者と副葬品はおおむね次のようになっている。

- ・分布は宮崎県南部・鹿児島県東部に特異的に分布している。
- ・単独で造成されたことはほとんどなく通常数基、それ以上、または100基以上の複数の地下式横穴墓が密集している地下式横穴墓群を形成している場合が多い。
- ・地下式横穴墓群では各墓の規模・規格・形式が同じである場合が多い。
- ・地下式横穴墓が重なって造成されることはなく、同じ時期に同時に造られたと考えられる。
- ・通常古墳群の中に存在している。古墳に従属的に配置されたと考えられる地下式横穴墓群が確認されている。
- ・地表面に墓の目印となるものがない。地表面に塚などの構造物・指石のような標示物がない。
- ・被葬者は成人が多い。乳児・幼児・子供は少ない。
- ・一つの墓(穴)に数名が埋葬されている。同性の成人が複数同じ墓(穴)に埋葬されている。すなわち複数の男性だけあるいは女性だけが同じ墓に埋葬されている。また複数の成人男女が同じ墓に埋葬されている。
- ・同時に複数の人が埋葬されている。追葬も確認されているが少ない。
- ・家族単位の墓でない、また一族単位の墓でない。
- ・被葬者に戦闘等の傷が確認されていない。死因は戦闘等でない。

- ・通常被葬者は棺に納められていない。被葬者は仰向けに伸展して葬られ、墓空洞の下部地面にそのまま安置されている。石が敷き詰められてその上に遺体が安置されている場合もある。
- ・副葬品は刀剣・鏃（やじり）などの鉄製武器と土師器・須恵器などの土器が多い。蛇行剣・異形鉄器が多いことも特徴的である。副葬品は質素である。
- ・一部には鎧、馬具、鏡、勾玉等の装身具が副葬されている場合があるが数は少ない。

#### 地下式横穴墓は邪馬台国の殉葬の墓

地下式横穴墓は前述の通り形式・様式等が特殊でありこの地下式横穴墓が何かは解明されていない。筆者はこの地下式横穴墓こそ邪馬台国の王・王族が死亡した時に殉死させられた人々の殉葬の墓だと考える。前述の地下式横穴墓の特徴を一つ一つ検証していくと殉葬者の墓であるとの結論になる。

- ・地下式横穴墓は宮崎県南部から鹿児島県大隅半島に特異的に分布している。筆者が想定した邪馬台国の範囲と重なる。他の地域では見られない。この風習は邪馬台国特有で当時の他の日本の地域では殉葬が行われていなかった可能性が高い。従って今まで日本で殉葬の墓が発見されていない理由になる。
- ・地下式横穴墓が群集して存在する。すなわちかなりの多くの人間が同時に死亡して同時に埋葬された可能性が高い。多くの成人男女が同時に死亡する場合は戦争・戦闘・疫病・災害が考えられる。地下式横穴墓の被葬者の遺体（骨）には戦闘で死亡した痕跡がない。疫病の場合は成人だけが死亡しない。幼児・子供も死亡する。この墓の被葬者には幼児・子供が埋葬されている例が少ない。また多くの人が死ぬような災害はいつも起こるわけではない。
- ・通常遺体は棺に納められていない。遺体を棺に納めるのにはいろいろな理由があるが、遺体が傷んだり腐敗した場合運搬・埋葬に便利であることは重要な理由である。地下式横穴墓の場合、棺がないということは死亡してすぐに埋葬した可能性が高い。
- ・地下式横穴墓を造成するにはかなりの労力・人手が必要である。地下式横穴墓群ではそれぞれの墓の規格がそろっていることから同時に複数の墓が造成されていた可能性がある。造成にはかなりの日数が必要となる。すなわち人が死亡してから墓を造ったのでは遺体が腐敗してしまい棺が必要となる。事前に準備されて造成されていた可能性がある。
- ・単独で形成されず複数で地下式横穴墓群を形成している。また古墳に従属してあるいは古墳群の中に存在している。そしてそのそれぞれの墓には複数の成人が埋葬されている。古墳の被葬者と何らかの関係があることは確実であるが地下式横穴墓の被葬者の年齢構成・副葬品から見て古墳の被葬者の家族・一族が埋葬されているのではないと考えられる。
- ・ほとんどの場合、男性の副葬品は鏃・刀剣などの武器で、女性の副葬品は須恵器などで非常に質素である。
- ・日本の墓制では家族単位の先祖代々の墓というのが通常考えられる。しかしながら古墳時代では家族単位の墓でなく一族単位の墓であったとの説もある。この場合でも一族の墓

として親・子・その兄弟が埋葬されている。嫁は実家の墓に埋葬されて夫婦で埋葬されないとの説がある。家族単位あるいは一族単位の先祖代々の墓であれば老人・壮年の人物・乳幼児等が時を経て別々に埋葬されるのが通常である。当時の乳幼児の死亡率は非常に高かったことを考えると乳幼児の埋葬数が多くなければならないが、地下式横穴墓の場合乳幼児の埋葬例は非常に少ない。複数の成人が同時に同じ墓（穴）に埋葬されている例が多い。これらから考えて地下式横穴墓は通常の家族単位、一族単位の墓でもないと考えられる。複数の家族単位あるいは一族単位の墓が集まった共同墓地ではない。

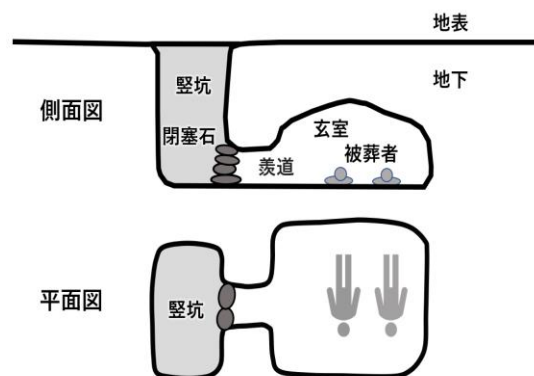
これらのことを総合的に判断すると地下式横穴墓は古墳の被葬者に対して奴婢を殉葬した特別な墓であるとするのが合理的である。すなわち邪馬台国の殉葬の墓であるとの結論になる。

(引用終わり)

地下式横穴墓分布図



地下式横穴墓概略図



### 3. 「龍王山古墳群」は纏向古墳群の殉葬の墓

龍王山古墳群は奈良県天理市に位置する古墳群で龍王山の西山麓に東西約2 km、南北約1 kmに広がって分布している。奈良県桜井市の纏向遺跡に近く、崇神天皇陵と治定されている行燈山古墳からは東に約1 km、景行天皇陵に治定されている渋谷向山古墳から東に約1 km、また倭迹迹日百襲姫命の墓と治定されている箸墓古墳からは東北に2.5 kmに位置する。

奈良県立橿原考古学研究所 1993 『龍王山古墳群：竜王山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 68. によると特徴は次の通り。

- ・円墳と横穴墓が各 300 基以上、合わせて 600 基以上確認。推定 1000 基以上。
- ・小型円墳直径 3～5 m 程度が隣接して整然と並んでいる。石室がある。
- ・横穴墓も整然と並んで存在する。石室がない。
- ・一つの墓に複数埋葬されている場合がある。
- ・棺がある場合と棺がなかった場合がある。棺の有無は釘の出土と棺を置く石台の有無で判断している
- ・副葬品は刀子、鉄鏃、土器、耳環、小型馬具、鏡はない。副葬品は質素
- ・年代は確定していない

龍王山古墳群の円墳、横穴墓は盗掘されている場合が多く遺物、遺骨等があまり残っていない。龍王山古墳群は地下式横穴墓とはよく似た特徴を示している。同規格の小型円墳または横穴墓が隣接して数基から 10 基まで整然と並んでおり、同時期に造られた可能性がある。また副葬品が質素である。地下式横穴墓では棺がないが、龍王山古墳群では棺がある場合と棺がない場合もある。小型円墳では石室の規模、副葬品から見て埋葬者は成人と考えられる。横穴墓も副葬品からみて埋葬者は成人と考えられる。これらのことを総合的に判断して龍王山古墳群は殉葬の墓の集合とするのが合理的である。少し身分の高い殉葬者は棺に入れて小型円墳に単独で埋葬し、身分の低い埋葬者は横穴墓に棺に入れずに複数埋葬したと考えている。

龍王山古墳群は大きな古墳に従属的に配置されているわけではない。龍王山古墳群の西側は纏向に隣接しており、上記の行燈山古墳、渋谷向山古墳、箸墓古墳、その他纏向古墳群の殉葬の墓の可能性が高い。

地下式横穴墓の場合、竪坑を掘りさらに横穴を掘るのでかなりの労力を必要とする。しかし横穴墓の場合は斜面に横穴を掘るのであるから地下式横穴墓に比べて労力が少なく済む。省力化のために横穴墓に移行したと考えられる。古墳を平地に造成した場合、横穴墓を造成する斜面がない。したがって距離が少し離れた斜面がある場所、すなわち山中に造ることになる。そのため主古墳と離れた場所に造成されることになり、横穴墓と主古墳の関係に気づかなかつたと推測している。

## 纏向地域の地図



(地理院地図を用いて筆者作成)

## 4. 考察・結論

「地下式横穴墓」と「龍王山古墳群」は墓の特徴から考察して殉葬の墓である可能性が高い。すなわち「地下式横穴墓」は宮崎市にあった邪馬台国の殉葬の墓であり、「龍王山古墳群」は初期ヤマト王権の箸墓古墳を含む纏向古墳群の殉葬の墓と考えられる。

「地下式横穴墓」は畑などの農作業中に偶然発見されることが多く、盗掘を受けておらず保存状態の良いものが多く、遺物、遺骨が良好な状態で発掘されている。一方一般的に「横穴墓」は斜面に造成されているので雨などにより入り口が露出して多くの場合盗掘されていて、遺物、遺骨などが残っていない場合が多い。このため実態が良くわかっていないのが現状と理解している。

「地下式横穴墓」の場合は遺骨等が多く発掘されているので、近年遺伝子 DNA 解析技術が非常に発達して簡単に行われるようになっており、主古墳の被葬者と地下式横穴墓の被葬者との関係並びに地下式横穴墓の被葬者間の血縁関係が判明すること並びに今後放射性炭素年代測定によって年代が確定することを期待する。

この説はあくまで仮説であるが、今後研究が進み「地下式横穴墓」と「横穴墓」が殉葬の墓であるとの認識が広がると古代史の解明につながるようになると考えている。

以上

#### 参考文献

- ・奈良県立橿原考古学研究所 1993 『龍王山古墳群：竜王山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 68.
- ・奈良県立橿原考古学研究所 『奈良県遺跡調査概報 2006 年』
- ・宮崎県教育委員会 宮崎県文化財調査報告書
- ・宮崎市教育委員会 宮崎市文化財調査報告書
- ・東串良町教育委員会 東串良町埋蔵文化財発掘調査報告書
- ・えびの市教育委員会 えびの市埋蔵文化財調査報告書
- ・土田章夫『邪馬台国は宮崎市にあった！』ビジネス社 2021  
(宮崎県内の調査報告書の参考文献詳細は『邪馬台国は宮崎市にあった！』の参考文献参照)